

英語学習から見た日本語の曖昧さ

島岡 丘

はじめに

英語教育に関係している立場から現在の日本語の音声をみると、一部に混乱があるように思えるのは私ばかりではあるまい。Jenkins(2000)の提唱する母語を重視する英語教育では、母語にどのように変化を与えれば、英語の発音が抵抗なくできるかということである。しかし、土台となる日本語がはっきりしないと、やはり、従来通りに英語のアルファベットから学習することになる。

1. 国際語としての英語と日本語との関係

英語の中にも混乱がないわけではない。英米語の差、地域方言の差、社会的階層の差などがあり、一つの英語体系にはなりにくい印象を与える。また、それよりも大きな問題は、英語を非母語とする人たちが、国際通用語として英語を駆使し始めたことである。その人口は極めて大きく、ロンドン大学King's Collegeの社会言語学者J.Jennifer博士は、外国語の歴史において、母語話者よりも非母語話者の数が初めて上回ったことを同女史の著書、*The Phonology of English as an International Language*(OUP, 2000)で次のように述べている。

For the first time in the history of the English language, the second language speakers has outnumbered those for whom it is the mother tongue,...(p.1).

同女史は具体的にその人口を次のように述べている。英語母語話者は3億5千万人、英語非母語話者で英語を自由に駆使するものは11億5千万人、計15億人であるという。すなわち、この地球上に住んでいる60億人強のうち、4人に一人は英語を母語並みに駆使しているということになる。極端な言い方をすれば、英語は世界通用言語(international language)で、以上のことから、英語の共通的な特徴を厳しく問うていかなければならなくなった。この

小論では、英語という言葉の音声の特徴を明確にしたあと、その習得に関することを考えてみたい。

ただし、英語の特徴は、音素的観点からいえば、母音の数20、子音の数24、音調3種、強勢3種、合計50となる。ただし、英語の場合は文字26種と余りにも差があるので、英語内でも文字と音声との関係を明らかにする必要もある。

2. アルファベットの複雑さ

アルファベットは26文字のAからZまで配列されている。音節の観点から見ると、それぞれの呼称の発音は次の構成になっている。

AEIOのような	母音または二重母音
UYのような	半母音(/j/, /w/) + 母音
FLMNSのような	/e/ + 子音
Hのような	/eɪ/ + 子音
BCDGJKPTVZのような	子音 + 母音
Qのような	子音 + 半母音 + 母音
Rのような	/ɑ:/ + /r/
Xのような	/e/ + 子音 + 子音(/ks/)

その上、アルファベットの呼称には、全ての英語の音素は含まれていない。すなわち、/æ ʌ ɪ ʊ ə ɔː ɔʊ ɔɪ ɪə eə uə ɡ ʃ ʒ ŋ h/の17種は用いられていないのである。さらに子音音素については、音節末に呼称音があっても、音節頭には生じていない場合があり、特に/l/と/r/には注意する必要がある(6を参照)。

効果的に教えるには、何らかの体系性があるほうが望ましい。そこで、体系性が明確な日本語五十音図を活用して英語学習の促進をはかる可能性を追求する。しかし、いくつか曖昧な日本語の音素を明確化しなければならない。

3. 破擦音の「ヂ、ヅ」と摩擦音の「ジ、ズ」との区別

アルファベットの呼称には、GとZの対立がある。発音記号では、それぞれ、/dʒ/と/ʒ/とで区別する。前者の破擦性と円唇性を近似カナ表記で示すには、

「ヂューイ」と「ズイー」

で区別する以外は、難しい。この前提として、「ヂ」と「ジ」の区別がなければ、近似カナ表記も意味がなくなってしまう。

病気のエイズが流行したとき、メディアはすべてエイズと書いた。エイズと書いたのは筆者はまだ見ていない。しかるに英語はAIDS[erɪz]であって、A's[erɪz]ではない。同様に、トランプの複数であるとcardsと車の複数であるcarsとの識別は近似カナ表記を使って、それぞれ、「カーズ」と「カーズ」と区別できるのであるが、ただし肝心の「ヅ」と「ズ」の音実質の区別できないと、カナを使って英語発音の学習を容易にする試みは成功しないことになる。

4. 閉鎖音の「ブ」と摩擦音の「ヴ」とは別々に

現在80歳前後の日本人はテレビのことを「テレヴィ」と書いていたようだ。英語ではtelevisionまたはTVだから、当然vの音を示す「ヴ」が用いられるはずである。しかし、最近「テレビ」「ビデオ」「ビエラ」「ビジター」「バカンス」などが当たり前になり、楽器の「ヴァイオリン」も「バイオリン」が多く用いられる。

「テレビ」で育った若い世代は、「ヴ」の音が出しにくくなっているようだ。/b/と/v/の違いは、調音点が前者が両唇、後者が歯唇とするだけで、調音法が対立的になっていることには気づかないことが多い。英語の/v/の特徴は、調音点は歯唇であるだけでなく、調音法が摩擦であって、/b/が持っている閉鎖性ではないということである。調音点だけが正しければそれでよいということにはならず、むしろ、調音法のほうにもっと関心を向けるべきである。日本語として日本人の間で通じればよいという考えのために、英語の音声習得の困難さにさらに皺寄せされている。

筆者はそのような傾向に歯止めをしなければならぬと思い、2005年の科研費で、『英語の発音と発音記号』、『「近似カナ表記」2000語英英和辞典』を出版した。日本語の音声がいれば英語の発音は容易に習得できることを実例で示したつもりである。

「ヴ」の音が日本語にないから、それに近いと考えられる「ブ」に変更するという以外に、もう一つの変更理由があるのではないか。それは「ヴ」が単独に日本語に入れようとしたからではないかと思う。/v/を「ヴ」として日本語に入

れて定着するにはその無声歯唇音である/f/を無視するわけにはいかない。「ヴ」は福沢諭吉による発明であると文献に残っているが、/f/についてはなんら言及がないのは片手落ちである。筆者は/f/と/v/を対立的に捉え、前者を「ウ°」と表したが、2003年以来、英語教科書の出版の老舗である開隆堂より、『サンシャイン英和辞典』などに採用されている。

5. 英語では「イ」が2種類

日本語では、母音の種類はアイウエオの5つである。また、それぞれの母音は長短によって10種類(5×2=10)の母音対立を表わすことができる。しかしながら、英語は長短ではなく、音質差によって母音を区別する。例えば、「住んでいる」意味のliveと、「出かける」意味のleaveとは、母音の音質が異なっており、それぞれの発音記号を、live[liv]とleave[li:v]のように表すと、学習者は母音の長さの差に注目してliveは母音を短くし、leaveは母音を長いものと解釈しがちである。

英語での口頭伝達が増えた現在、英語の母音の音質差を示す発音記号が求められる。音質差は舌の位置や舌の使われる部分、口の開きなどが関係するので、少なくとも、長短の区別に限定しやすい/:/:の有無よりはむしろ、別の記号を用いるほうが望ましい。筆者の関係した学習辞典『プロシード英和辞典』(1978)は、live[lɪv]のように/i/を用いた最初の試みだった。その後多くの学習辞典でこの方式が広まったが、中学校の文部科学省検定教科書では依然として、簡易表記を用いている。

しかし、問題はこれだけではない。日本の学校では未知の漢字があると、伝統的に振り仮名を付けて覚えるようにしている。英語に未知の語があると、それに発音記号を付けてその発音を確認してきた。しかしながら、大学生でも発音記号を習わなかったとか、読めないという声を多く耳にする。どんな風に勉強してきたかと尋ねると、綴り字を見ながら、なんとなく発音してきたと言う。

2005年の夏、ロンドン大学に行き、英語発音辞典の編者でもある、John C. Wells教授にインタビューをした際、日本からの留学生たちは発音記号を読めないが、中国から来た留学生たちは発音記号を読めると言われたのはショックであった。帰国後、早速、発音記号を読ませるような上記のミニ冊子を編集し学会などを通して普及を図っている。同書によって、英語の発音表記とそれに近づいた近似カナ表記に開眼してくれる学習者が増えることを期待したい。

発音記号を活用できるようにするには、学習者によく分

かるカタカナを最も英語に近くなるように工夫した表記システムを「近似カナ表記」として、発音記号と併記するようにした。イの2種類の発音を次のように示した。

イの1. /i:/	イー/	例: eat [i:t]	「イート」
イの1(弱音). /ɪ/	イイ/	例: happy [hæp.i]	「ヘアピー」
イの2. /ɪ/	イ ^ㄷ /	例: mitt [mit]	「ミ ^ㄷ ト」

この方式によって、What's this?のthisの発音は「^ㄷイ^ㄷス」の表記を学習者は見ることになり、少なくともtheseの母音とは違う母音で発音しやすくなること、また、アイルランド方言のthis [ðɪs]に似る場合もあるということになる。

同様に、エ、オの2種類、ア、ウの3種類を次のように設けている。

エの1. /eɪ/	エイ/	例: great [gret]	「グウレイト」
エの2. /e/	エ/	例: get [get]	「ゲエト」
オの1. /oʊ/	オウ/	例: coat [kout]	「コウト」
オの2. /ɔ:/	オー/	例: caught [kɔ:t]	「コート」
アの1. /æ/	エア/	例: hat [hæt]	「ヘアト」
アの2. /a/	ア/	例: height [hait]	「ハイト」
アの3. /ɑ:/	ア ^ㄷ /	例: hot [hɑ:t]	「ハ ^ㄷ ート」
ウの1. /u:/	ウー/	例: school [sku:l]	「スクーウ」
ウの2. /u/	ウ ^ㄷ /	例: book [buk]	「ブ ^ㄷ ク」
ウの3. /ʌ/	ウ ^ㄷ /	例: bud [bʌd]	「ブ ^ㄷ ド」

6. lとr

/l/と/r/が区別できないのが日本人という定着した考え方がある。Palaceの発音をParisのような発音をしたために、「バッキンガム宮殿」を見られずに親切な警察にパリ行きの列車に乗せられた話、タクシーに乗った際、Turn leftと言ったはずなのに、Directと聞き間違えられ、直進してしまった話、Riceと言ったつもりがウェイターにはLiceと聞き間違えられ、不快な顔をされた話など、酒の肴にされることがある。

果たして日本人は一生涯、lとrとは区別できないのだろうか。英語のネイティブに習えば両者の区別ができるようになるのだろうか。筆者はALTからどうすれば日本の学生にlとrの区別を教えられるのか尋ねられたことがある。何度も英語を聞かせれば英語らしく発音ができるようになるというのは幻想に過ぎないようだ。学習者が一人一人が工

夫を重ね、何度も試してようやく可能になるのだ。

近似カナ表記では、light(交通信号, 軽い)とright(右, 権利, 正しい)の区別と次のように書き表す。

light^ㄷ「ライト」 right^ㄷ「ライト」

そのように示す理由は、/l/は側音で舌先が必ず歯茎にしっかりと付くからであり、その形は/n/の発音をするときと全く同じだからである。

7. 終わりに

国際化の波はInternetやマスメディアを通してほとんど毎日のように身近に感じる時代となった。保守的な体質は誰しも持っているが、以上のような言葉の問題は、これまで、様々な形で取り組まれてきた。しかしながら、国際化した英語、つまり、国際通用語としての英語に対しては従来の英米を中心とした英語圏とは異なるアプローチが必要となる。

日本語という便利な言葉が身近にあるので、つい英語に対して外国語と解釈し、日常茶飯事化した英語を遠ざける傾向が見られる。

21世紀はどのような世紀になるかとよく評論家が語るようだが、英語を駆使できるようにしなければ、日本の将来はない。そのことを可能にするのは、熱意ある教育に拠るのみである。発音中心の英語教育というところに、英語の教師はフォーカスを持つ必要がある。本学に居られた鈴木善保先生からいただいた加納治五郎先生の教育綱領(現代日本語に一部変更)を引用して今後の糧としていきたい。

教育之事	天下これより偉なるは無し
一人の徳教	広く万人に加わる
一世の化育	遠く百世に及ぶ
教育之事	天下是より楽しくは無し
英才を陶鑄し	兼ねて天下を善くす
其身亡ぶと雖も	余薫る永存。

参考文献

- 青木昭六・島岡丘(2003)『サンシャイン英和辞典』開隆堂出版。
 青木昭六・島岡丘(2005)『サンシャイン英和・和英辞典』開隆堂出版。
 Jenkins, Jennifer(2000) *The Phonology of English as an International Language*. OUP.
 島岡丘(2005a)『発音と発音記号』(科研費プロジェクト)いばらき出版。
 島岡丘(2005b)『近似カナ表記』2000語英英和辞典』同上。
 島岡丘(2004)『日本語からスーパーネイティブの英語へ』創拓社出版。